

氏 名	は じ 地 亮
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 164 号
学位授与の日付	平 成 12 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 哲 学 専 攻
学位論文題目	ウィトゲンシュタインにおける心と言語の哲学

論文調査委員 (主 査) 教 授 伊 藤 邦 武 教 授 山 本 耕 平 助教授 中 畑 正 志

論 文 内 容 の 要 旨

ウィトゲンシュタインは20世紀を代表する哲学者の一人であるが、その思想の軌跡全体を統一的に解釈することは必ずしも容易ではない。その第一の理由は、『論理哲学論考』に代表される初期の思想と、『哲学探求』に代表される後期の思想との間に、大きな断絶が見られるからである。さらに、ウィトゲンシュタイン哲学の解釈における第二の困難の理由として、彼の叙述のスタイルの問題がある。彼の著作は、前期から後期まで一貫して、いずれも短い断章を綴り合わせたアフォリズム集の体裁を取っており、一般の哲学書のような体系的構造や、特定の理論的立場の擁護のための論証の展開という形態をもっていない。そのために、彼の著作はややもすれば個々の批判的分析として興味深い論点を含むものの、全体の主題と論旨がきわめて分かりにくいという印象を与えることになる。

本論文はこのような困難を克服して、ウィトゲンシュタインの思想全体を統一的に解釈しようとする試みの一つである。そのために論者が採用した解釈の方法の特徴は、次の三点からなる。(一)一般にあまり詳しく検討されることの少ない、中期の諸著作を細かく分析することによって、前期から後期までの思想の流れを一望できるようにする。とくに、これまで独立の著書として公刊されていない手稿についても、様々な資料を細かく参照してその内容を再構成し、思考の流れのダイナミックな構造を明らかにする。(二)これらの流れにおいて一貫して追求されている中心的課題を特定し、その課題にたいする解答として彼の個々の著作内容を整理したうえで、それがそれぞれの程度まで整合的なものであるかを批判的に吟味する。その際とくに、ウィトゲンシュタインの課題が、伝統的な哲学の主題とどの点で接点をもち、どの点で独創的な問題意識であったかを、明確にするようにする。(三)ウィトゲンシュタイン哲学をすでに完成されたものと考えてのではなく、むしろ未完成に終わった可能性のあるものと理解することによって、最終的に残された問題を視野に入れて解釈する。そして、ウィトゲンシュタイン哲学と現代の哲学における問題関心との接点を突きとめることを試みる。本論文はこのような解釈の方法に則って、ウィトゲンシュタイン哲学を思想発展史的観点と批判的観点の両方を使って総合的に理解しようとしたものである。

本論文で論者がウィトゲンタインの中心的課題と理解するのは、具体的には、「私的なものと公的なものとの関係」という主題である。この主題は伝統的には人間の認識の主観性と客観性の合致の可能性という形で、認識論において追求されてきた問題であるが、筆者によれば、ウィトゲンシュタインの哲学の独創は、この問題を認識の妥当性の問題としてではなく、むしろ経験と言語、あるいは心と言語の過不足ない調和の可能性の問題として追求したところにある。すなわちウィトゲンシュタインは、心の作用そのものに内在する私的公的両側面の介在、言語の意味作用における私的公的両側面の介在、そして心と言語との相互関係の存在という形で、何重かにからみあった複雑な現象全体が、ひとつの統一的な、見通しの良い描像へともたらしうる性質のものであるかどうかという問題を、その哲学的探究の第一の主題としたのである。そして、ウィトゲンシュタインの哲学がとりわけこのような問題意識によって動機づけられた理由は、彼自身がいわゆる独我論的思考法に強く傾く傾向をもちつつ、この傾向を克服する必要を痛感したところから、独我論に替わる心と世界との関係の理解に強

い意欲をもったという点にあるというのが、筆者の主張である。

論文全体は、「序文」、第一章「超越論的自我と独我論批判」、第二章「現象学的考察と感覚的経験」、第三章「行為と状況の哲学」、「結論」からなる。「序論」は以上の分析の方法論の説明と、筆者の考えるウィトゲンシュタイン哲学の中心的課題の特定に当てられている。第一章は前期思想の分析であり、『論理哲学論考』と『日記』をテキストとする。第二章は中期思想の分析であり、『哲学的考察』『哲学的文法』『青色本』などの独立の著作と、遺された多数の手稿をテキストとする。第三章は後期思想の分析であり、『哲学探究』を主たるテキストとする。そして「結論」は、以上の分析の総括と、ウィトゲンシュタイン哲学が未完に終わった課題のさらなる追求の方向の模索に当てられている。本論文の実質的内容をなす第一章から第三章までの思想発展史的考察の骨子は以下の通りである。

第一章。『論考』の前期哲学においては、言語の有意味性の限界を、命題の一般的な論理形式によって確定するという、カント的な超越論的考察がなされたが、その結論部において、独我論は命題によって語りえずして示しうる真理であるという両義的で曖昧な議論が主張された。これはショーペンハウアー流に現象主義的に改変されたカント思想を背景にした、超越論的自我の両義性に由来するものであった。この超越論的自我は、世界に論理と倫理とを同時に付与することによって現象世界を成り立たせているものであり、それゆえ、世界の内部には存在しないがどこかには存在しなければならないという両義的な在り方をする。ウィトゲンシュタインは「私は世界の限界である」と主張することで、この自我の存在論的ステイタスを確定しようとしたが、これは成功しなかった。なぜなら、倫理的主体による世界の限界確定は、命題の一般形式による言語の内側からの世界の限界確定という主題と衝突するからである。結局のところ、前期の超越論的哲学においては、「私」は、身体や外的世界などの公的なものと結びついておらず、それゆえ、独我論を十分に批判できず、逆に独我論に絡め取られるという格好になってしまった。

第二章。中期のウィトゲンシュタインは、前期のアプリオリズムに対する反省から、経験に問いかけながら経験の文法を探るという方法を採用した。彼は「経験の無所有権説」によって「私」を排除し、コミュニケーションの説明によって他者の感覚的経験を排除しようとした。しかし、「私」の排除は首尾よく果たされたが、感覚的経験に関しては深刻な問題を抱えることになった。すなわち、彼は感覚の一人称的表現を、第一次言語あるいは現象学的言語において「私的対象」を指示することとして分析したが、この指示に関しては原理的に誤りがありえないとされる以上、その意味作用は無意味であり、独我論的である。またコミュニケーションに関する行動主義的な観点による三人称的表現の説明も、他者は私の現象世界の中で感覚を感じているだけだという、独我論に危険なほど接近することになった。やはりまたしても、彼は独我論から脱することができなかったのである。このことは経験の哲学的分析において独我論への誘惑がいかに強力であるか、ということと教えるとともに、公的なものと私的なものとの距離を測ることがいかに困難な問題であるか、ということも露にしている。

第三章。後期のウィトゲンシュタインは、「言語ゲーム」というフレームワークを導入して、独我論的思考からの脱却をはかった。すなわち、感覚語の使用は、それが振る舞いにとってかわる「表出」として捉えられることによって、公共的な事実性を付与される。またそれと同時に、表出としての感覚語においては、表現と表現されるものとの区別がなく、いわば自律的、自己完結的に、われわれの生の形式——人間という種の生活における活動形式——を構成する。そこにはもはやカント的な現象世界は措定されない。しかしながら、ウィトゲンシュタインは生の形式ということを重視するあまり、言語を取り巻く外的事実性と言語との結びつき、換言すれば、言語が一つの事実として、物理的対象の恒常性や身体の生理的、物理的構造などの他の事実と密接に関係していることを、軽視しがちである。それゆえ彼は、そうした言語の外部と対比して理解されるような、感覚的経験に特有な確実性と直接性とを考慮に入れることができず、結局「私的なものは存在しない」とか「私的言語は存在できない」という主張を行っているかのような印象を与えることになった。彼は私的なものをあまりにも間接的に扱おうとして、かえってその公的な側面の範囲の厳密な特定に失敗したのである。

筆者は以上のようなウィゲンシュタイン哲学全体の分析にもとづいて、結論として、彼の思考法がアプリオリズムからの漸進的な脱却の途であったとしても、それは未完のものであったと評価する。ウィトゲンシュタインは自分の哲学が科学的考察であってはならないという、それ自身根拠のない信念によって強く制約されており、その結果言語ゲームによる探究と経験科学的研究との協働の可能性を認めることができなかった。彼の信念はいわば、伝統的な哲学にたいする批判的意識から、科学的知識の実証主義的世界観にたいしても過剰な反撥を抱いた結果生じたものである。しかし哲学と経験的科学の連

統的な接続の可能性はむしろ、独我論を克服するという当初の目標にとって、積極的に追求されるべきリサーチプログラムであったはずである。したがって、認知科学や神経生理学などと言語ゲーム論が、「クオリアの本質はトークンである」といった認識を共有しつつ統合されるならば、物理的世界における感覚的経験などの私的なものの位置は、より明晰なたちで把握できるようになるであろう、というのが本論文の結論である。

論文審査の結果の要旨

本論文は20世紀の代表的な哲学者の一人であるウィトゲンシュタインの思想について、その全体像を解明しようとした野心的な研究である。ウィトゲンシュタイン哲学の解釈には独特の困難が付きまといっている。それは主として、彼の思想が前期と後期において大きく断絶を見せているという事実と、彼の理論構成のスタイルが何らかの主張の積極的論証ではなく、むしろ伝統的な哲学的反省の陥穽を「治療的に」解消するという、メタ哲学的性格を色濃く持っているという事情に起因する困難である。彼の哲学についてはこれまでも、国の内外を問わず非常に多くの研究が発表されてきているが、それらの多くはこうした困難のゆえに、ある種の偏りを示すという通弊をもっていた。それは例えば、前期と後期のいずれか一方のみを積極的に評価するという一面性をもっていたり、あるいは、治療的な解消の方法を極めて革新的なものとして過大評価したり、反対に、積極的な主張の表面的な不在のゆえに全面的にその価値を認めない態度という形で現れていた。本論文はこれまでの研究に見られるこれらの偏りを意識して、その限界を乗り越えようという明確な意図のもとに構成されている。

論者はこの意図に沿って、ウィトゲンシュタイン哲学の解釈の方法として次のような方針を採用しているが、この方針は類似の研究に見られない独創的なものであるとともに、きわめて適切な方針であると考えられる。(一)これまで資料の制限もあって詳しく検討されることの少なかった中期の著作を、最新の資料整理を利用して細かく分析することによって、前期から後期までの思想の流れの全体像を一望できるようにする。(二)これらの流れにおいて通底している中心課題を特定して、その課題のそれぞれの時期における達成度を批判的に吟味する。(三)とくに、ウィトゲンシュタイン哲学をすでに十分に完成されたものとするのではなく、むしろ道なかばで未完のまま終わった可能性のあるものと想定することによって、最終的に残された問題までも視野に入れて公平な評価を下す。

本論文はこのような解釈の方針のもとに構成された、ウィトゲンシュタイン哲学の思想発展史的かつ批判的な分析であるが、その成果は以上のような意図を十分に果たす、非常に詳細かつ注意の行き届いた解釈となっていると思われる。本論文がウィトゲンシュタイン哲学解釈に新たな寄与をなした主な点として、以下の点を挙げることができる。

(1)ウィトゲンシュタイン哲学は一般に言語分析の哲学と考えられているが、一方ではいわゆる「心の哲学」、すなわち人間の精神現象の理論としても論じられることが多い。これまでの研究では、彼の哲学が言語分析であるとともに心の理論でもあるということの意味が、判然としない恨みがあった。筆者はこの哲学の中心的な主題を「私的なものと公的なものとの関係」と捉えなおすことによって、この哲学全体の性格を明らかにしている。この場合、私的なものと公的なものとの関係の探究とは、単純に心と言語との関係の探究ということではなく、むしろ、心の作用そのものに内在する私的公的両側面の存在、言語の意味作用における私的公的両側面の存在を認めたくえて、これら二つの二面的な現象相互の関係を問うという、複合的な探究である。

(2)ウィトゲンシュタインの哲学全体のモチーフをこのように複合的な問題の追求と理解することによって、『論理哲学論考』に代表される前期思想から、『哲学探究』に代表される後期思想への移行の問題も、より明解に理解できるようになった。この哲学の前期思想と後期思想の関係については、その間にどの程度の断絶を認めるべきかという点で、多くの解釈が存在してきたが、それらの解釈は概ね言語分析としての理論的転換の性質を問うものであった。しかし、言語画像説としての前期思想と、言語ゲーム理論としての後期思想という対比の本質は、その間に現象学的言語観や文法規則としての言語という雑多な着想を含む中期思想を加えても、容易に理解できるものではなかった。これにたいして、筆者は前期思想における言語分析と「自我」や「独我論」の理論という二側面が、中期思想の展開においてどのように交互にからみ合って追求されているかを分析し、さらに、その結果がどのように言語ゲーム一元論ともいべき後期の心と言語の理論に集約されることになったのかを説明することに成功している。

(3)言語ゲーム理論の由来をこのように複合的な探究の結果と解釈することは、ウィトゲンシュタインの後期思想の達成点

と未完の点とを特定することにも役立っている。具体的には、言語ゲームという概念は、一方では言語一般の意味成立を説明する分析上の方法論的モデルという役を担うとともに、表出という行為として人間の生の形式の記述の対象ともみなされるようになった。そして、この二つの観点はいわゆる「私的言語の可能性にかんする議論」のなかで、その両方の面を生かした形で融合されようと試みられた。しかし結果的にこの議論においてそのバランスの取れた利用は成功せず、一般に私的経験と理解される経験の直接性や確実性は不十分にしか確保されないものとなった。筆者によれば、これはウィットゲンシュタインにおける複合的な探究の最終的な未完成さとみなされるべきものであるが、この解釈はわれわれが彼の哲学にたいしてしばしば抱く不満の由来を、その源に戻って説得的に理解させるものである。

(4)以上のようなウィットゲンシュタイン哲学全体の性格にかかわる解釈以外にも、「規準と徴候」や「家族的類似性」、「言語の自律性」など、この哲学が含む独自の概念について、多数のテキスト相互の比較対照がなされている。とくに、規準と徴候という言語分析の道具立てが孕む問題性を細かく分析し、この概念自体が一つの家族的類似性をもったものであることを明らかにした部分は、これまでの平板な解釈を大きく乗り越えたものである。

以上のように本論文は、海外を含めたこれまでのウィットゲンシュタイン研究の蓄積を、さらに発展させる力をもった、包括的で説得力に富んだ研究である。ただし言うまでもなく、本論文においても論じ残された問題がないわけではない。例えば筆者はこの理論の「心の哲学」としての性格を、専ら感覚的経験を中心にして論じているが、ウィットゲンシュタインの理論のなかには、「意志」の問題のように、より広い範囲の精神活動への探究が見られると思われる。また、ウィットゲンシュタインの探究した課題をさらに追求する方途として、筆者は認知科学との協働の可能性を強く示唆しているが、その具体的な説明はきわめて簡単なものに終わっている。これらは、筆者が今後の研究において一層深く考察することが望まれる点である。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成12年9月26日、調査委員三名が本論文とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。